

臨床描画法「化粧画」の考案と臨床的有用性の検討

— 青年期女性における自己愛的傾向と強迫的傾向との関連から —

藤原可奈子*・石田 弓**

Contrivance of the clinical drawing “Make-up Picture” and investigation for clinical validity
From viewpoint of narcissistic tendency and obsessive tendency in adolescent woman

Kanako Fujihara* Yumi Ishida**

This research, as a technique for assessment of personality traits in adolescent women, investigated clinical validity by identifying relationships between characteristics in “Make-up Picture”, and narcissistic and obsessive tendencies in the subjects.

As a result, “skin”, “eyebrows”, “eye make-up”, “lips”, and “cheeks” were chosen for standard portrayals of characteristics. We observed several incidences of “Blended Lip Color” and “Unique Characteristics - Eyes” in subjects who rated highly in “Self Assertiveness”, a factor in “Narcissism”. Therefore, this indicates that make-up images are a pictorial method facilitating the projection of narcissistic tendencies in adolescent women.

Keywords: Make-up Picture, narcissistic tendency, obsessive tendency

問題と目的

1. 対人関係と人格特性

対人関係に影響を与える人格特性に自己愛が挙げられる。自己愛の障害は、誇大性（空想または行動における）、賞賛されたいという欲求、共感の欠如といった特徴をもち、健常者における自己愛傾向も対人関係に影響を及ぼすと考えられている。自己愛には、誇大・自己顕示的な「無自覚型」と他者からの反応に敏感で注目を避けたがる「過敏型」がある（Gabbard, 1994）。「無自覚型」は自己主張性が顕著で、他者から否定的に捉えられる可能性があるが、自分に自信をもち、安定した存在であると自己認識していることから、調和的対人関係を必要としていない（小塩, 2006）。一方、後者は「自己愛的脆弱性」を備えたものとして捉えられ、上地・宮下（2005）はこれを「自己の価値や存在意義と関連した不安や傷つきを処理し、肯定的自己評価や心理的安定を維持する能力

* 広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education, Hiroshima University）

** 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター（Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University）

の脆弱性」と定義している。しかし、「過敏型」も、心の奥底に自己顕示欲求を抱いており、その欲求を強く恥じているという (Gabbard, 1994)。

自己愛と同様に対人関係に影響を与えるものとして強迫が挙げられる。強迫性格は自己不確実性性格ともいわれ、良心的、几帳面、杓子定規、融通性・柔軟性の欠如、ささいなことにこだわる、完全癖が強いといった特徴を有している。成田 (1974) は、強迫症者の対人関係の取り込み方は、不安を精神内界に保持し自ら対処する「自己完結型」と、確認のために他人も巻き込む「巻き込み型」に分類できるとし、特に「巻き込み型」は対人関係が不安定となり、衝動的に暴力や自傷などの行動が生じやすいとしている。不安への対処に他者を必要としないという点で、対人関係における悪影響が考えられにくい「自己完結型」も、日々自身を苛む強迫観念や強迫行為を他者に変な目で見られていないかという不安を感じるという点で対人関係に影響を与えられられる。

自己愛と強迫は異なるものとして記述されているが、日常生活において両者との関連がみられるような行動が存在する。それには化粧行動、ダイエット、被服行動などといった「見られる自己の外見を磨き、他者には見えない完成された自己への満足感・効力感を得る」ための行動が挙げられるが、本研究では化粧行動に注目した。青年期女性の化粧行動は日常的なものであり、場面に応じて化粧の仕方を変えはするものの、それらの場面において「他者から好まれると思われる」自己像、あるいは「こうでありたい」自己像を化粧によって作り上げるという点で、自己表現の一種といえる。余語・津田・浜 (1990) は、化粧がもたらす心理的効果として本人の自信度や満足感を指摘しており、化粧は対人行動の重要な動機として考えられる。社会的な相互作用を行う上で、有効な表現力のうちに外的魅力があり、化粧をすることによって身体的魅力が増すと一般的には期待されている。また、公的自己意識が高い人は全般的に化粧へのこだわりが強く、実際に求める化粧は、化粧した顔や素顔に対する自信によって異なる (菅原, 1988) ことから、化粧による自己イメージの変化が対人関係を促進すると考えられる。野沢・沢崎 (2007) は、従来の、魅力的になる・元気になるといった「積極的な化粧の効用」に加え、普通になる・気分が落ち着くといった「消極的な化粧の効用」を想定し、対人恐怖傾向と化粧の心理的効用に対する認知・感情との関連を検討している。前者は自己愛的傾向と、後者は対人恐怖傾向との関連が示され、特に対人恐怖傾向の強い者については、自己を隠し、周りに合わせることで不安を落ち着かせようとする、そしてその手段として化粧をするということを示している。強迫症者は、不安を解消するために強迫行為を繰り返すが、化粧も同様に不安を解消するために行っていると考えられることから、自己愛的側面の「自己概念の下、または他者意識の下により自分を美しく魅せるため」の化粧行動と、強迫的側面の「より徹底的に自分の不安感を解消させるため」の化粧行動には、完成された顔への強いこだわりがみられるという点で共通する可能性がある。そして、自己愛的傾向と強迫的傾向のいずれとも関連をもつ可能性のある化粧行動には、それぞれの人格特性をもつ青年期女性の理想や願望、あるいは不安などが反映されられると考えられる。

2. 化粧と描画法

人類学において化粧は、「身体変工」、「色調生成」、「ペインティング」に分類され、「身体変工」は、ピアスやパーマといった身体の一部に手を加えて形を変えるもの、「色調生成」は、刺青やタト

ウーといった皮膚に永久的に色や模様を付け加える行為、「ペインティング」は、皮膚に色や艶を添える行為で、洗い落としてもとの状態に戻すことができるものである（平木，2003）。このように化粧は装飾的性質を帯びていると言える。本研究では化粧を「ペインティング」の意味で用いることとする。ファンデーションやチーク、アイシャドウなどの化粧品を用いる化粧は、「色を塗る」、または「描く」行為であり、臨床描画法（以下、描画法）と類似した性質をもっているといえる。したがって、描画法に人格特性が投射されるように、化粧という自己表現行為にも本人の人格特性が投射されている可能性がある。

そこで筆者は、青年期女性に化粧をした自分の顔を実際に描かせるという方法を考案し、「化粧画（Make-up Picture；MUP）」と命名した。これは、画用紙にあらかじめ描かれた顔に、被験者がクーピーペンシルで化粧をした自分の顔になるように彩色するもので、そこには描き手の実際の化粧行動の特徴が反映される可能性がある。また、女性としての意識的・無意識的な願望や理想、あるいは不安などの心理的側面が、既存の描画法と同様に投射されることが期待される。こうした描画法は他には存在しないが、最も近い描画法として人物画テストがある。「顔」は身体の中で最も目立つ部位であり、他者とのコミュニケーションの中心となることから、高橋（1974）は、人物画テストの「顔」は描き手が外界の現実世界とどのように接触しているかを象徴していると述べている。また、空井・清藤（2001）は、人物画テストにおける「顔」はアイデンティティを表すものであるとも述べている。個人差はあれ、多くの青年期女性は日常的に化粧をすることから、青年期女性にとっての顔は「化粧をした顔」であり、社会的なペルソナとして、向社会的側面を反映するものと考えられる。よって、「化粧をした顔」には青年期女性の人格特性やアイデンティティの特徴が反映されることが推察される。

そこで本研究では、MUPを一般女子大学生に実施し、心理アセスメントにおける有用性を検討するために以下の2つの研究を行う。まず、研究1では、女子大学生にみられる化粧行動の実態を調査し、自己愛的傾向や強迫的傾向との関連を明らかにすることを目的とする。研究2では、女子大学生のMUPの標準的描画特徴を明らかにし、MUPの描画特徴と自己愛的傾向や強迫的傾向との関連について検討することを目的とする。

方法

本研究は研究1、研究2の順番で個別に実施した。

対象者：A県内の大学に通う女子大学生107人（平均年齢20.1歳 $SD=1.30$ ）

調査期間：2008年10月6日～同年11月10日

【研究1】

質問紙

- (1) 化粧意識を調査するための質問項目：先行研究（例えば野沢・沢崎，2007）で明らかにされた化粧の効用を参考に独自に作成した。化粧に関する基礎情報（所要時間、金額）を尋ね、自由記述によって自己愛的傾向や強迫的傾向にみられる化粧への期待を検討した。化粧度はスキンケア度とメイクアップ度の合計である。大坊（2001）を参考に、自由記述で使用化粧

品（スキンケア化粧品，メイクアップ化粧品）を尋ね，それぞれスキンケア度，メイクアップ度とした。本研究では化粧度及びメイクアップ度を分析に用いた。

- (2) 自己愛人格目録短縮版 (Narcissistic Personality Inventory-S : NPI-S) (小塩, 1998) : 成人の健常者にある自己愛人格傾向を測定するための尺度。30 項目，5 件法で，「注目・賞賛欲求」，「優越感・有能感」，「自己主張性」の 3 因子から構成されている。
- (3) 強迫性格尺度改訂版 (Obsessive-Compulsive Personality Scale-R : OCPS-R) (関山, 2001) : 成人健常者に見られる強迫性格を測定するための尺度。15 項目，6 件法で，「完全さと公平さの追求」，「頑固・わがまま」，「優柔不断」の 3 因子から構成されている。

【研究 2】

化粧画 (Make-up Picture : MUP)

- (1) 材料：化粧画用紙 (A4 判画用紙)，クーピーペンシル，消しゴム
化粧画用紙は，A4 判画用紙に筆者が眉毛，目，鼻先，唇，耳を含む顔を描いたものである。
- (2) 教示：「この画用紙に描かれた顔に，クーピーペンシルを用いて，あなたが自分の顔に化粧をするかのように彩色してください」
- (3) 描画後の質問：「こういう化粧ができたらと理想的に描いた部分はありますか」，「普段化粧をするときどこに一番気を遣いますか」など，順に回答を求めた。

結果

1. 研究 1

(1) 自己愛的傾向と強迫的傾向との関連

Pearson の積率相関係数から，自己愛的傾向と強迫的傾向の間に 1%水準で有意な正の相関がみられた ($r=.261, p<.01$)。また，自己愛「過敏型」，「無自覚型」と強迫的傾向の関連を検討するため，NPI-S の「注目・賞賛欲求」，「自己主張性」，「優越感・有能感」3 因子と OCPS-R の尺度得点をもとに相関係数を求めたところ，「自己主張性」との間に強迫に 1%水準で有意な正の相関がみられた ($r=.352, p<.01$) (表 1)。

表1 自己愛下位尺度と強迫的傾向との相関

	強迫	注目・賞賛	優越・有能	自己主張性
強迫	-	.192*	.182	.352**
注目・賞賛		-	.340**	.146
優越・有能			-	.249**
自己主張性				-

* $p<.05$ ** $p<.01$

(2) 化粧度と自己愛的傾向，強迫的傾向との関連

Pearsonの積率相関係数から，各人格傾向と化粧度（スキンケア度平均3.84，メイクアップ度平均7.07）との関連がみられないことが示された（表2）。

表2 化粧度と自己愛的傾向、強迫的傾向との関連

	スキンケア度	メイクアップ度	化粧度
自己愛	.014	.177	.033
強迫	.013	-.187	-.165

(1) 標準的描画特徴

107名のMUPのうち、70%以上の対象者が彩色していた「肌」、「眉毛」、「アイメイク」、「唇」、「チーク」を標準的描画特徴とし、その特徴を有した描画を図1に示した。「肌」ははだいろを用いて顔全体に彩色しているもの、「眉毛」は眉毛の中を彩色しているもの、「アイメイク」は目の周りにアイシャドウとしての彩色をしているもの、「唇」は規定の唇の中に彩色しているもの、「チーク」は頬の部分に彩色しているものを指す。各部分への彩色率を表3に示した。

表3 MUPの各部分への彩色率

	彩色率		彩色率
肌	69.2%	まつげ	52.3%
額	46.7%	唇	91.6%
眉毛	69.2%	チーク	79.4%
アイメイク	84.1%	鼻	35.3%

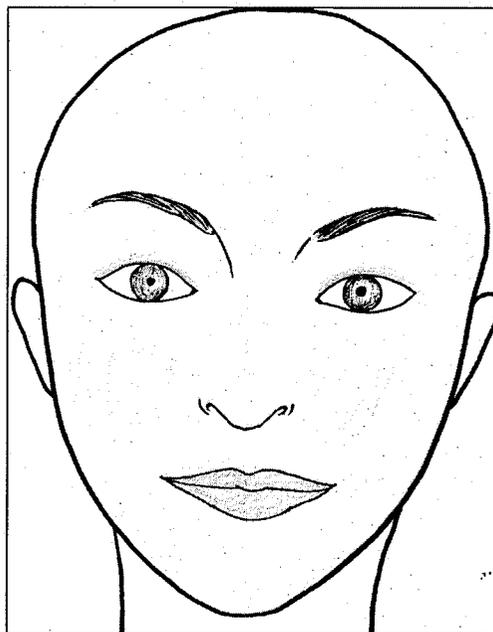


図1 標準的描画特徴

(2) 自己愛的傾向と強迫的傾向における描画特徴

107名のMUPから自己愛的傾向、強迫的傾向それぞれの高群(37名)と低群(37名)を上位下位33%に分類し、MUPの各部分への彩色率を求めた(表4, 5)。

表4 自己愛的傾向にみられるMUPの各部分への彩色率

	高群	低群		高群	低群
肌	70.2%	67.6%	まつげ	45.9%	67.6%
額	43.2%	48.6%	上	11.8%	44.0%
眉毛	83.8%	59.5%	上下	88.2%	56.0%
単色	64.5%	81.8%	唇	86.5%	97.3%
混色	35.5%	18.2%	単色	37.5%	50.0%
アイメイク	89.2%	81.1%	混色	62.5%	50.0%
単色	27.3%	16.7%	チーク	86.5%	81.1%
混色	72.7%	83.3%	鼻	45.9%	35.1%

表5 強迫的傾向にみられるMUPの各部分への彩色率

	高群	低群		高群	低群
肌	73.0%	73.0%	まつげ	54.1%	59.5%
額	63.0%	59.3%	上	30.0%	54.5%
眉毛	70.3%	73.0%	上下	70.0%	45.5%
単色	73.1%	66.7%	唇	89.2%	91.9%
混色	26.9%	33.3%	単色	51.5%	35.3%
アイメイク	83.8%	83.8%	混色	48.5%	64.7%
単色	25.8%	22.6%	チーク	83.8%	83.8%
混色	74.2%	77.4%	鼻	43.2%	37.8%

1) 自己愛的傾向における描画特徴

① 自己愛的傾向における描画特徴

自己愛的傾向の高い対象者の描画特徴を検討するため、標準的描画特徴と出現数の少なかった特殊な彩色(「上まつげ」、「下まつげ」、「眉毛の混色」、「特殊効果・目」、「特殊効果・鼻」、「特殊効果・眉毛」)について、高群(37名)、中群(33名)、低群(37名)の彩色率によって χ^2 検定を行った。その結果、「特殊効果・目」では1%水準で高群の彩色率が有意に高く、「上まつげ」では5%水準で高群の彩色率が有意に低いことが示された(表6)。

なお、「上まつげ」は上まつげのみの彩色をしているもの、「下まつげ」は上下のまつげを彩色しているものとした。「眉毛の混色」は、「眉毛」の彩色を2色以上で行っているものとした。「特殊効果・目」は、標準的描画特徴にみられる有色彩色の「アイメイク」ではなく、アイホールや目頭、目尻、上下瞼、目下の頬、眉毛の下付近に白色を用いた彩色が施されているものとした。「特殊効果・鼻」は、標準的描画特徴の「鼻」の輪郭彩色ではなく、鼻筋を強調させるために白色やはだいろを用いて鼻筋の彩色をしたものや、「鼻」以外の肌を濃くすることで鼻を浮き立たせているものとした。

「特殊効果・眉毛」は、用紙にあらかじめ描かれた「眉毛」をはみだした彩色を指す。高群と低群の典型例を図2に示した。

表6 自己愛的傾向高群・中群・低群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	残差分析	χ^2 値(df=2)
上まつげ	高群(n=37)	2	35	-2.4*	6.312*
	中群(n=33)	7	26	.6	
	低群(n=37)	10	27	1.8	
特殊効果・目	高群(n=37)	14	23	3.0**	10.000**
	中群(n=33)	6	27	-4	
	低群(n=37)	3	34	-2.5*	

* $p < .05$ ** $p < .01$

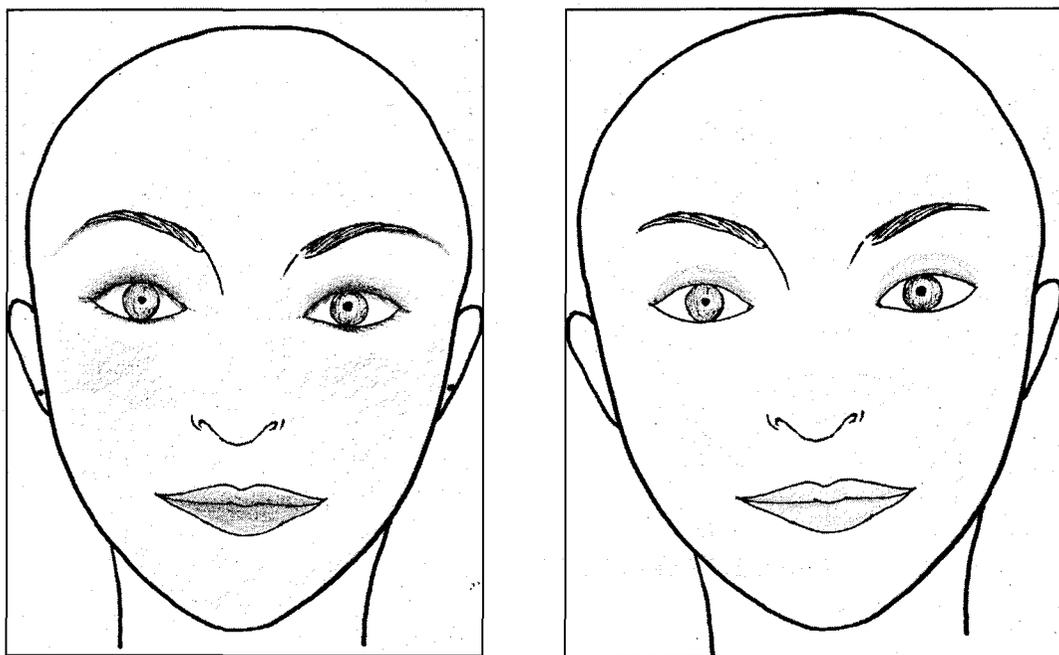


図2 自己愛的傾向高群(左)と低群(右)の描画特徴の比較

② 「自己主張性」における描画特徴

次に自己愛の下位尺度「自己主張性」高群(39名)、中群(31名)、低群(37名)における標準的描画特徴と出現数の少なかった特殊な彩色の彩色率を比較するために χ^2 検定を行ったところ、「唇の混色」、「特殊効果・目」では1%水準で高群の彩色率が有意に高かった(表7)。なお、「唇の混色」は「唇」の彩色に有色2色以上を用いているものとした。「自己主張性」各群の典型例を図3に示した。

表7 「自己主張性」高群・中群・低群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	残差分析	χ^2 値(df=2)
唇の混色	高群(n=39)	26	13	2.8**	9.114*
	中群(n=33)	14	17	-5	
	低群(n=37)	12	25	-2.4*	
特殊効果・目	高群(n=39)	15	24	2.8**	8.499*
	中群(n=33)	6	25	-6	
	低群(n=37)	4	33	-2.5*	

* $p < .05$ ** $p < .01$



図3 自己主張性高群(左)と低群(右)の描画特徴の比較

2) 強迫的傾向における描画特徴

強迫的傾向高群(37名), 中群(33名), 低群(37名)における標準的描画特徴と出現数の少なかった特殊な彩色の彩色率を比較するために χ^2 検定を行った(表8)。その結果, 「眉毛の混色」では, 5%水準で高群の彩色率が有意に低かった。強迫的傾向各群の典型例を図4に示した。

表8 強迫的傾向高群・中群・低群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	残差分析	χ^2 値(df=2)
眉毛の混色	高群(n=37)	7	30	-2.1*	11.661**
	中群(n=33)	18	15	3.4**	
	低群(n=37)	9	28	-1.2	

* $p < .05$ ** $p < .01$

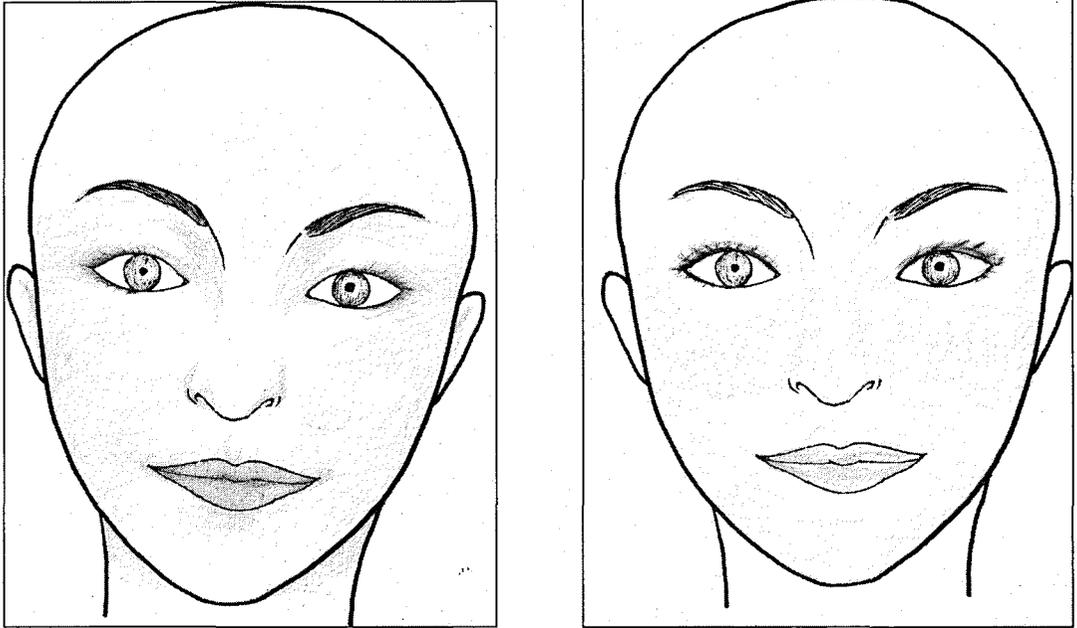


図4 強迫的傾向高群(左)と低群(右)の描画特徴の比較

3) 自己愛的傾向と強迫的傾向の描画特徴の関連

① 自己愛的傾向と強迫的傾向の描画特徴の関連

自己愛的傾向と強迫的傾向の間には1%水準で有意な正の相関が見られたことから、MUPにも同様に関連がみられる描画特徴があることが推測される。そこで、自己愛的傾向の高群と強迫的傾向の高群について各項目における彩色率を比較するため χ^2 検定を行ったところ、「唇の単色」では5%水準で自己愛的傾向と強迫的傾向がともに高い対象者の彩色率が他の2群と比較して低く、「額」では、5%水準で強迫的傾向のみ高い対象者の彩色率が高いことが示された(表9)。

表9 自己愛的傾向高群と強迫的傾向高群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	残差分析	χ^2 値(df=2)
唇の単色	自己愛強迫高群(n=20)	3	17	-2.4*	6.191*
	自己愛高群(n=17)	7	10	.6	
	強迫高群(n=17)	9	8	1.9	
額	自己愛強迫高群(n=20)	4	16	-1.8	6.436*
	自己愛高群(n=17)	5	12	-.6	
	強迫高群(n=17)	10	7	2.5*	

* $p < .05$

②「自己主張性」と強迫的傾向の描画特徴の関連

自己愛の下位尺度である「自己主張性」と強迫的傾向の間には 1%水準で有意な正の相関がみられたことから、MUP でも同様に関連がみられる描画特徴があることが推測される。そこで両傾向がともに高い対象者(20名)、「自己主張性」のみが高い対象者(19名)、強迫的傾向のみ高い対象者(17名)について各項目における彩色率の差を比較するため χ^2 検定を行ったところ、「唇の混色」では強迫的傾向のみ高い対象者にみられる彩色率が、自己主張性と強迫がともに高い対象者や自己主張性のみ高い対象者よりも 5%水準で有意に低いことが示された(表 10)。

表10「自己主張性」高群と強迫的傾向高群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	残差分析	χ^2 値(df=2)
唇の混色	自己主張強迫高群(n=20)	14	6	2.0*	11.577**
	自己主張高群(n=19)	12	7	1.2	
	強迫高群(n=17)	3	14	-3.4**	

* $p < .05$ ** $p < .01$

(3) 化粧度、メイクアップ度と描画特徴との関連

化粧度とメイクアップ度の程度が MUP の描画特徴にどのように反映されるかを検討するため、各項目について化粧度とメイクアップ度それぞれ高群と低群で χ^2 検定を行ったところ、化粧度の高群は 1%水準で他 2 群よりも「アイメイク混色」、および「下まつげ」の彩色率が有意に高く、メイクアップ度の高群は 1%水準で他 2 群よりも「アイメイク混色」、および「下まつげ」の彩色率が有意に高いことが示された(表 11-1, 11-2)。

表11-1 化粧度の高群・中群・低群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	残差分析	χ^2 値 (df=2)
アイメイク混色	高群(n=36)	32	4	4.1**	39.527**
	中群(n=32)	25	7	2.3*	
	低群(n=39)	9	30	-6.2**	
下まつげ	高群(n=36)	20	16	2.8**	7.904*
	中群(n=32)	8	24	-1.7	
	低群(n=39)	12	27	-1.1	

* $p < .05$ ** $p < .01$

表11-2 メイクアップ度の高群・中群・低群における彩色率の比較

評定項目	群	あり	なし	残差分析	χ^2 値 (df=2)
アイメイク混色	高群(n=35)	32	3	3.8**	27.368**
	中群(n=33)	25	8	1.4*	
	低群(n=39)	14	25	-5.0**	
下まつげ	高群(n=35)	19	16	2.8**	8.126*
	中群(n=33)	8	25	-1.6	
	低群(n=39)	11	28	-1.2	

* $p < .05$ ** $p < .01$

考察

1. 研究1

(1) 自己愛的傾向と強迫的傾向の関連

自己愛的傾向と強迫的傾向の間には1%水準で有意な正の相関がみられ、特に自己愛的傾向の中でも「自己主張性」と強迫的傾向との関連が強かった。自己愛的傾向の「自己主張性」は自分の意見をはっきりと言う、自ら決断する、自己中心的、物事が自分中心に動いていると考えるといった特徴をもつ(小塩, 1998)。自己愛的傾向は強迫的傾向にみられる完全癖といった特徴をもち、自らのうちにある自己愛的欲求を満たすためにより徹底的に、完全主義的に、強迫的に物事をこなす可能性が考えられる。西村(2007)は、曖昧さへの不安から強迫傾向になり、その防衛として曖昧さを知的に把握してコントロールしようとする統制欲求が表れると指摘している。自己愛的欲求を満たすためにとられる徹底的な行動と統制欲求を満たすための強迫的行為には、完璧にこなしたいという点から共通する部分があると考えられる。両者にみられる、自らの思う通りに徹底的に物事をこなしたいといった欲求が、他者にあわせて自分の考えを調整するといった柔軟性を抑制し、自己愛的で対他的な行動として表現される自己主張性と、強迫的で対自的な、不安から回避するために自分中心に物事を考えざるを得なくなるという特徴につながると考えられる。このことから、両傾向は頑な態度をもち、それゆえに融通がききにくいといった特徴をもつという点で共通する可能性が考えられる。

一方、自己愛的傾向の「注目・賞賛欲求」と強迫的傾向との関連はみられなかった。「過敏型」の

自己愛と強迫的傾向は「不安」をもつという点で関連がみられると考えていたが、前者が対人関係と関連する不安をもつのに対し、後者が特定の事柄に関連する不安をもつことから、両者に関連がみられなかったのは「不安」の対象が異なるためと考えられる。

(2) 化粧度と自己愛的傾向、強迫的傾向との関連

化粧度と各人格傾向との関連はみられなかった。スキンケア化粧品とメイクアップ化粧品の使用数は個人の化粧行動そのものへの関心や必要性の程度によって決まることが考えられる。他者にみられることを意識する人であっても、少ない化粧品を用いて時間をかけてより丁寧にスキンケアやメイクアップを行う場合や、社会的な礼儀として必要最低限のスキンケアやメイクアップを行う場合は、化粧度に人格傾向は反映されにくいと考えられる。

大坊 (1991) は、化粧度 (使用している化粧品数をそのまま得点として用いたもの) と対人不安には負の相関があり、化粧度と自尊心の間には正の相関があることを報告している。自尊心との関連から、化粧度と自己愛的傾向との間にも正の相関がみられると考えていたが、相関はみられず、先行研究の結果とは一致しなかった。これは、自己愛的傾向が高くても日常的にメイクアップを行わないために化粧度が低くなる者もみられたためと考えられる。化粧度のみではなく化粧する部分やそこにかかる時間との関連についても検討していくことで、人格傾向と化粧との関連性についての理解が深まることが考えられる。

2. 研究 2

(1) 標準的描画特徴

107 名の MUP における各部位の彩色率を算出し、標準的描画特徴を見出した。そして、これらのうち約 80%以上が彩色していた「アイメイク」、「唇」、「チーク」を平凡反応とした。彩色率が約 80%の部分は、日常的にメイクアップを行わない者でも彩色する傾向にあり、一般的に化粧というと思いつきやすい部分であると考えられる。特に「唇」の彩色率は 90%以上であり、日常的なメイクアップにおいて口紅を塗らない者や日常的にメイクアップを行わない者も日常的に口紅を塗る者と同様に MUP の「唇」に彩色する傾向にあった。「まつげ」は 70%に満たなかったため、標準的描画特徴には含めなかったが、人格傾向に関係なく描かれており、メイクアップにおけるマスカラのイメージから「まつげ」は一般的に着目されやすく、MUP にも描かれやすかったものと思われる。

(2) 化粧度、メイクアップ度と描画特徴との関連

化粧度はスキンケア度とメイクアップ度の合計である。本研究の対象者はスキンケア化粧品よりもメイクアップ化粧品を多く用いていたことから、化粧度にはメイクアップ度が大きく反映されており、MUP にもメイクアップ度の程度が反映されたと考えられる。スキンケアはメイクアップのベースとなるものであり、彩色という意味を含まないため、表現しにくいといった要因も考えられる。

メイクアップ度の高い女性は日常的なメイクアップにアイシャドウやアイライナーを 2 色以上使用している傾向がみられたことから、MUP にも 2 色以上を用いた彩色をしたことが考えられる。アイシャドウを 2 色以上使用する際には、単に混ぜるだけでなく、のせる部分も考慮して混ぜる必

要がある。日常的にメイクアップを行っている女性は、こうした「魅せる」ための知識を得た上でアイメイクを行うため、MUP においてもグラデーションを作ったり、ポイントとして濃い色をのせたりする傾向がみられたと考えられる。

また、「特殊効果・目」についても、白色を用いたアイメイクの効果や利点を知っている女子大学生は、MUP にも白色を用いて彩色することが明らかになった。さらに、「下まつげ」は、マスカラのイメージをもって描かれたものであると考えられる。上まつげだけを描く女性も少なくなかったが、日常的にメイクアップをしている女性で、マスカラを使用している女性は、普段自分の顔に化粧をしているように MUP でも下まつげを描くものと思われる。

(3) 自己愛的傾向と強迫的傾向における描画特徴

1) 自己愛的傾向における描画特徴

自己愛的傾向高群では、MUP の「目とその周辺」の彩色が顕著かつ巧妙であった。自己愛「自己主張性」にも多くみられたが、「アイメイク」では有色数色を用いた彩色のみでなく、白色を用いることでハイライト効果を狙った「特殊効果・目」の彩色や、より実際に近い扇状に広がった「まつげ」の彩色を施していた。「まつげ」は「上まつげ」のみを描く対象者が少なかったことから、「まつげ」を描く場合には、目をより大きく、美しく見せたいという願望のもとに行われる日常のアイメイク、特にマスカラのイメージが反映されたものと考えられる。現代のメイクアップは「礼儀」としての要素以上に、ファッションの意味合いを含む「自己表現」としての要素を備えている。どの部分へのメイクアップを重視するかは個人によって異なるが、近年多くの女性はアイラインやアイシャドウ、マスカラといったアイメイクに重点をおく傾向にある。それは一般的な傾向であると考えられるが、自己愛的傾向の高い対象者と低い対象者の描画では、「アイメイク」の巧妙さに違いがみられたため、MUP における「目」の彩色は自己愛的傾向にみられる自己主張性を反映するものと考えられる。実際に化粧をする場合、アイラインの引き方やアイシャドウの乗せ方で顔の印象が左右されることが知られており、目は自分を魅力的にアピールしやすい部分であることから、MUP において「アイメイク」で表現される「目」は、他者に見せたい「魅力的な自分」が投映されやすいと考えられる。

有意差がみられなかったが、自己愛的傾向の高い対象者には、単なる輪郭線によって強調するのではなく、白色によるハイライト彩色や、はだいの濃淡によって立体的に見せる「鼻」の彩色が多くみられたことから、より自然に「鼻」を強調しようとしていることがうかがわれた。これは「自分の顔に化粧をするかのように」と教示したために、日常的に行うメイクアップを忠実に再現している可能性もあるが、より美しく魅せたいという自己愛的願望が背景にあることが考えられる。

さらに、自己愛「自己主張性」の高い対象者は「唇の混色」が多く、「口」と自己主張性との関連が考えられる。「口」は意見表明をするための部分である。「自己主張性」の高い女性は、自己主張に密接に関連する「口」である「唇」への彩色が顕著であり、特にその方法として混色を行っていたことから、「唇の混色」は「自己主張性」の高さを表すものと考えられる。また、「唇」が彩色されやすい部分であった理由として、「化粧＝口紅」という印象が根強く、日常的にメイクアップを行わない者も彩色を行っていたためと考えられるが、「自己主張性」の高い対象者にみられた「混色」

といった手法を取り入れた彩色は、「唇」への彩色が女性的魅力をアピールしやすいという意味で自己主張的なものであると考えられる。言語的な自己主張ではなく、魅力を視覚的に訴えるような自己主張が MUP の「唇」に反映されたと考えられる。1 色だけでなく、2 色以上を用いた混色による彩色が多くみられたため、1 色では表現できない「唇」の印象を、2 色以上混ぜることによってより自分を魅力的にアピールしようとする自己愛的欲求の存在の可能性が考えられる。自分にとってより理想的な、表現したい自分を現実反映させた結果として「唇の混色」がみられ、そこには自己愛的傾向が投影されている可能性が考えられる。

彩色をしていた者は少なかったが、「唇」や「眉毛」の彩色にあたってはあらかじめ描かれた形をのみだした彩色もみられ、枠にはとらわれず自分を表現しようとする自己愛的な自己主張性が投映されていると思われる。特に「眉毛」の形や色は顔の印象を左右するため、自己愛的傾向の高い対象者はその知識をもとに形や色を表現している可能性がある。自己愛的傾向の高い対象者にみられた「眉毛」の特徴として、用紙にあらかじめ描かれた「眉毛」をのみだした彩色が挙げられる。MUP の「眉毛」に眉頭または眉尻が足りないと感じた場合には、その部分を描き足すことによって、より理想的な山型の眉毛を表現している。これは自己愛的傾向の、枠にとらわれず他者に見せたい自己のイメージをありのままに表現しようとする欲求の表れであり、MUP に自己愛的欲求が投影されたものと考えられる。

2) 強迫的傾向における描画特徴

強迫的傾向の高い対象者の特徴として「眉毛の混色」の少なさが挙げられる。教示に忠実に従い、普段の自分のおこなっている化粧の過程を再現しようとした可能性がある。眉毛を書くための眉ペンシルや眉マスカラなどは単色で用いられることが多く、強迫的傾向の高い対象者においては、クーピーペンシルの中に自分の望む色がない場合、複数色を混ぜ合わせて新しい色を作るよりも、すでにある色を用いて眉毛を描き上げようとした可能性も考えられる。

高群、低群で MUP の彩色率にほとんど差がみられなかったことや、少人数でも強迫的傾向の高い対象者にみられる描画特徴がなかったことから、本研究で明らかにした各項目は強迫的傾向を反映しにくい可能性が高い。化粧意識に関する質問紙への自由記述では、強迫的傾向の高い対象者は化粧をすることによって、「他者からどうみられているかという不安を解消させることができる」や、「自分が作られた」、「自分らしく堂々といられる」、「ちょっとはマシになった」、「少しは自信がついた」と感じていたことから、化粧に求めるものは「美」ではなく「安心」であることがわかる。よって、強迫的傾向の高い対象者にみられる化粧の意味は、他者に自分の魅力をアピールするといったものではなく、自らの心理的な安定を保つために不安を解消し、落ち着かせることにあると考えられる。これらのこと、MUP の各項目には「安心」といった化粧の意味が反映されにくかった可能性も考えられる。

また、強迫的傾向の高い対象者においては、化粧意識を問う質問紙の回答の中に、日常的なメイクアップと特別な日や相手の場合に行うメイクアップに質的变化を求めないものがみられた。これは強迫的傾向のある対象者が曖昧さや不安定さを避けたがるという特徴をもつことに関連し、特別な日だから普段行わないメイクアップをしたり部分的に加えたりするよりも、普段行っている自信

のあるメイクアップをより綿密に行うことで、失敗の恐れを避けようとするのが理由として考えられる。

3) 自己愛的傾向と強迫的傾向の描画特徴の関連

自己愛的傾向の高い対象者と強迫的傾向の高い対象者の描画特徴の違いとして「額」が挙げられる。強迫的傾向のみ高い対象者は「額」の彩色が多かった。髪の毛の描かれていない化粧画用紙という刺激に対して、中途半端な形で塗り残しをつくらないようにしようとした可能性が考えられる。また、強迫的傾向のみ高い対象者では、自己愛「自己主張性」のみ高い対象者と比較して「唇の混色」の彩色が少ないことや、強迫的傾向のみ高い対象者にみられる「特殊効果・目」の彩色率 23.5%が、自己愛「自己主張性」の高い対象者の彩色率 42.1%よりも低いことが明らかになった。「目」は自分を魅力的にみせるための表現がしやすい部分であると考えられることから、MUP でも「特殊効果・目」は魅力的にみせようとする「自己主張性」を反映したものであることが推察される。さらに「唇の混色」については、「唇」が女性的な魅力をもっともアピールできるという点で「自己主張性」を表現しやすい部分であると考えられる。自分の思うように完璧にこなしたいという点で共通すると考えられる両者の徹底的な行動の背景にある欲求の違いが、これらの描画特徴に表れたものと考えられる。自己愛的に、他者に魅力的に見せるために理想的な自分を徹底的に表現するという意味は対他的であるが、強迫的に、曖昧さや不安定さを回避するために気が許すまで完璧に徹底的に顔を作り上げるという意味は対自的であるといえる。そのため、自己愛的傾向の高い対象者の描画には強迫的傾向の高い対象者の描画よりも多く「特殊効果・目」や「唇の混色」の彩色が表れたものと考えられる。

本研究のまとめ

筆者は、青年期女性にみられる人格特性をアセスメントするための技法として MUP を考案した。その端緒として本研究では自己愛的傾向と強迫的傾向との関連から MUP の有用性の検討を行った。そして、「肌」、「眉毛」、「アイメイク」、「唇」、「チーク」といった標準的描画特徴を見だし、人格傾向別にみた描画特徴として、自己愛的傾向、特に自己愛を構成する要因のなかでも「自己主張性」の高い女子大学生には「唇の混色」、「特殊効果・目」が特徴的であることを明らかにした。「唇」や「目」は女性的魅力をアピールするための自己表現がしやすい部分であるということから自己愛的な意味を含むと考えられる。一方、強迫的傾向は MUP の各項目には反映されにくいことが明らかになった。

今後の課題

MUP には人格特性、特に自己愛的傾向と日常的なメイクアップの状態が反映されることが示された。しかし、対象者が少なく、MUP が広く青年期女性の心理アセスメントのための技法と言うには不十分であり、MUP が、青年期女性のより深い心理的側面を理解する一助となるには、さらなる工夫が必要となる。今後の課題として、自分の描いた MUP を振り返ることで、描き手の自己理解（自分への気づき）が促されるかどうか、あるいは自己理解を促すためには、どのような「描

画後の質問」が有用であるかについて検討していく必要があると考えられる。そして、対象者を増やし、広く青年期女性における MUP の有用性の検討を行い、MUP を有用な描画法として確立していきたい。

引用文献

- 大坊郁夫 (1991). 容貌の構造的特徴と対人魅力 化粧文化, 24, 55-68.
- Gabbard,G,O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice:The DSM-IV edition*. Washington:American Psychiatric Press.
- 平木千絵 (2003). 就職活動経験者の化粧観 同志社大学立木茂雄研究室 2003年度卒業論文.
<tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/Thesis2003/03_HIRAKI.pdf >(2009年1月16日).
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14 (1), 80-91.
- 成田善弘 (1974). 強迫神経症についての一考察—「自己完結型」と「巻き込み型」について— 精神医学, 16, 957-964.
- 西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して— パーソナリティ研究, 15(2), 183-194.
- 野沢桂子・沢崎達夫 (2007). 対人恐怖傾向と化粧の効用意識との関連 目白大学心理学研究, 3, 95-108.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 日本教育心理学会 日本教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (2006). 自己愛傾向と5因子性格: 自己愛傾向の2成分モデルの特徴 中部大学人文学部研究論集
- 菅原健介 (1988). 対人的不安研究における公的自意識の定義 東京都立人文学部編 人文学報, 196, 103-116.
- 関山 徹 (2001). 強迫性尺度作成の試み—女性における因子構造の検討— 中京大学文学部紀要, 36 (2), 25-36.
- 空井健三・清藤理恵 (2001). 人物画から見た青年の変化 発達, 86, 57-70.
- 高橋雅春 (1974). 描画テスト入門 HTP テスト 文教書院
- 余語真夫・津田兼六・浜 治世 (1990). 化粧が容貌印象に及ぼす影響 日本心理学会第54回大会 発表論文集, 715.